ATELIER MUJI GINZA
2019

MUJI HOTEL
GINZA
MUJI HOTEL
6

ATELIER MUJI GINZA、始動。

『ATELIER MUJI』は、田中一光氏により命名され、
「ここは暮らしの原点にたちかえり、未来へすすむヒントを見つける工房です。」
というスローガンのもと、無印良品有楽町店内にて活動してきました。
未来を見据えたこの活動は、良品計画初の複合的なデザイン文化の交差点として、
2019年4月4日、新たなデザインの発信基地『ATELIER MUJI GINZA』に生まれ変わりました。
ものづくりやデザインを日本の文化として確かなものに根付くよう、
何かを見いだし、学び、つくり、守り、そして時として壊す。

過去、現在、未来という時間の流れの中で、
世界に目を開き、耳を傾けながら、
磨かれ、引き継がれ、愛されるものやこと。
これからも、無印良品が無印良品であるために

ATELIER MUJI GINZA

無印良品 銀座 6F
ATELIER MUJI GINZA
フロアマップ

①Gallery
ものづくりやデザインにまつわる展示を行う2つの展示空間「Gallery1」、「Gallery2」。この2つのGalleryはそれぞれ年に3回から4回ほど企画を変えながら、ものづくりやデザインにまつわる展覧会を開催。
展覧会を通じて、多様な意見や価値観を共有し、行動することによってつくられる未来を考えていきます。

②Salon
大きな楠のバーカウンターと、ゆったりとくつろげるテーブル席が並ぶ「Salon」。厳選された生産者や作り手によるコーヒーや紅茶、日本茶、また、ここでしか味わえない甘味やカクテルとともに、落ち着いたひとときをお過ごしいただけます。

③Library
「ATELIER」や「Book Design」などのA～Zまでのキーワードをもとに選書された、デザインにまつわる書籍をご覧いただける蔵書スペースです。

④Lounge
様々なイベントを開催する「Lounge」。展覧会にまつわるトークやワークショップ、多様なイベントを通して人とことを繋いでゆきます。普段は心地の良いソファでLibraryの書籍をお楽しみいただけます。

⑤Shop
展覧会に関連したアイテムをSalonで提供している食品や器なども一部販売しています。POP UP WINDOWでは、展覧会の企画に合わせたセレクトの商品などを販売します。

目次

Gallery1 8

『変える。エンツォ・マーリと“栗の木プロジェクト”』展 10
Exhibition “To change. Enzo Mari and the “Chestnut Tree Project””

『長く生きる。“DNA”を繋ぐ50脚の椅子』展 18
Exhibition “Surviving long into the future---50 chairs passing down their DNA”

『考える。益子の新しい伝統に向けて』展 26
Exhibition “To think: Towards a new tradition in Mashiko”

Gallery2 32

『言葉からはじまるデザイン 栗の木プロジェクト』展 34
Exhibition “Design emerging from words - The Chestnut Tree Project”

『Archives: Bauhaus』展 42
Exhibition “Archives: Bauhaus”

『廃業を目指すデザイン』展 48
Exhibition “Designed to go out of business”

『インドの手仕事、文字になる』展 54
Exhibition “Handcraft for the digital: Type design from India”

展覧会クレジット・イベント一覧 61

グラフィックデザインで見る展覧会 71

Gallery 1

「かつてデザインは、平等の名のもとに優れたスタンダードを生み出す役割を担ってきた。しかし高度成長を経て、大量の商品を売るための手段に成り下がった。私はデザイナーであることを恥じている。これから提案するのは、目先の経済ではなく、栗の木を植えその木が成長し、やがては人々がその実を味わい、木陰で憩えるような、長い目で未来へと持続するプロジェクトだ。企業はそうした視点を持つべきではないか」

2002年より良品計画と親交を温めてきたイタリア デザインの巨匠、エンツォ・マーリは、あるとき私たちにこう投げかけました。良品計画はこれに賛同し、ATELIER MUJI GINZAの2つのギャラリーで、マーリの問いかけへの答えの第一歩となる展覧会の企画をスタートしました。題して「栗の木プロジェクト」。

2019年、Gallery1で開催した3本の展覧会は、マーリのデザイン哲学を支柱にした3つの動詞をそれぞれのテーマとしています。展示内容は後のページでご紹介するとして、まずその動詞に込めた考えをシンプルに書き留めたいと思います。

「変える」。
プロジェクトによって人や社会を動かす、ユートピアへ向かう志向を忘れないこと。

「長く生きる」。
ロングライフデザインのアーキタイプ（元型）を知る。
過剰を生まない、長く愛されるスタンダードを目指すこと。

「考える」。
独自にリサーチして自分の頭と手で考えていくこと。

ややもすれば「単純に理想を追っている」と呟かれそうなテーマですが、複雑化する現代だからこそ立ち戻りたい原点と考えています。デザイン展というかたちに代えて、静かな発信を続けることで、ものづくりの世界に小さな変化を起こすことも不可能ではないはずです。

さらに、Gallery1にはもう1つのミッションがあります。私たちの展示品はおもに、福岡在住のインテリアデザイナー、永井敬二氏の膨大かつ貴重なモダンデザインのコレクションからお借りしています。その知られざるコレクションを広く紹介するとともに、永井氏のデザインの活動と記憶をアーカイブしていくこと。これがもう1つの「栗の木プロジェクト」です。

2本の栗の木が、元気に育って未来の誰かの役に立ちますように！

株式会社良品計画 企画デザイン担当
ATELIER MUJI GINZA キュレーター　田代かおる

『変える。エンツォ・マーリと“栗の木プロジェクト”』展
―永井敬二コレクションより―

Exhibition “To change. Enzo Mari and the “Chestnut Tree Project””
-Curated from the Keiji Nagai collection-

2019年4月4日(木)−7月21日(日)

“栗の木プロジェクト”を植える。

なぜ無印良品で、イタリア デザイン界の巨匠、エンツォ・マーリの展覧会なのか？2002年、無印良品ではマーリによるプロジェクト、テーブルと椅子、計19点を発表しました。以来両者の交友関係は続き、後にマーリが私たちに提案したのが、未来に向けて果実を育む「栗の木プロジェクト」です。

私たちは、ATELIER MUJI GINZAの活動を通じて何ができるかを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。本展では、1本目の栗の木を植える試みとしてエンツォ・マーリの仕事の根っこをご紹介します。そこから、ゆっくりと大きく枝葉が伸びていく姿を想像しながら。

ATELIER MUJI GINZA

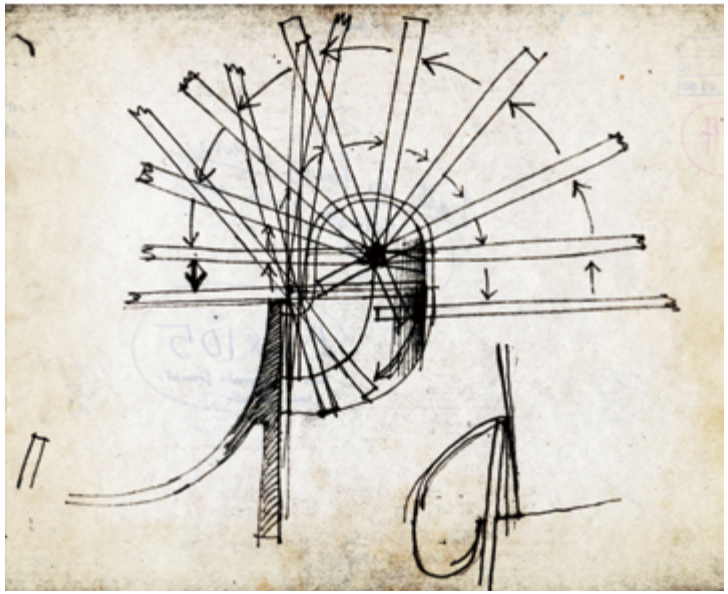
Nacása & Partners Inc.

展示と共鳴するブックレット

萬代基介建築設計事務所による、浮遊するような透明感ある空間構成を尊重するため、会場内では言葉による解説をミニマムに抑えました。一方でエンツォ・マーリは、「かたちの後ろに何があるのかを知れ」、と常々語ってきたデザイナーです。そこで、Gallery1では展示品の理解を深めるツールとしてのブックレットの制作に取り掛かりました。

1　スタンダード / 日用品のユートピア
2　蝶番 / 部品をどのように組み立てる?
3　アーキタイプ / 根を張って枝葉を伸ばす
4　美しさ / かたちの後ろに隠されているもの
5　遊び / 私たちのプロジェクトの原点

ブックレットは、これら5つに分類された展示に沿って、マーリのデザイン哲学と個々のプロジェクトのストーリーをシンプルに語ります。全47ページの冊子は、「栗の木プロジェクト」ローンチのマニフェスト(宣言)でもあり、ここを起点に、Gallery1は本展に続く2回の展示で、マーリのデザインについての考えを独自に掘り下げて伝えていきます。



「Java」のスタディスケッチ

発行日：2019年4月1日
発行者：株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当
冊子グラフィックデザイン：須山悠里＋島田耕希＋小島沙織
写真（展示物）：知識たかし
写真（ポートレート）：Ramak Fazel©Casa BRUTUS 2001年6月号『ITALIA』
Special thanks：長崎県美術館、デザイン誌「AXIS」、「カーサ・ブルータス」編集部、Ramak Fazel
構成・テキスト：田代かおる（株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当、ATELER MUJI GINZA キュレーター）
編集：永田貴大（株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当）

Ramak Fazel©Casa BRUTUS 2001年6月号『ITALIA』

エンツォ・マーリ

1932年イタリア、ノヴァーラ近郊生まれ。
エンツォ・マーリはミラノ、ブレラ芸術アカデミーで学び、視覚芸術に取り組んでいた50年代より、ブルーノ・ムナーリの紹介でデザインを手がけ始めました。
50年を超えるキャリアを持ち、プロジェクト数は1000を超え、クライアントの反発を恐れない商業主義批判と、独自のデザイン哲学、ユートピアを語り続けることで社会に影響を与えています。

Gianluca Widmer

永井敬二コレクションについて

Gallery 1の展示品はインテリアデザイナー永井敬二が50年にわたり自分自身の目と手と足で世界中から集めた戦後モダンデザインを主体とする膨大なコレクションの一部をお借りしています。永井氏は1948年、佐賀県唐津市生まれ。1982年に自身のスタジオ〈ケイアンドデザインアソシエイツ〉を設立。国内外の文化交流に貢献し、デンマーク王国より「Furniture Prize」を受賞しました。Gallery 1では、永井氏のコレクションをお借りしながら展覧会を開催してまいります。

『長く生きる。“DNA”を繋ぐ50脚の椅子』展
―永井敬二コレクションより―

Exhibition “Surviving long into the future---50 chairs passing down their DNA” -From the collection of Keiji Nagai-

2019年7月26日(金)−11月24日(日)

Gallery1では、モダンデザインの歴史上、もっとも長く生産が続けられている一脚の椅子を原点に、その“DNA”を未来へ繋ぐ50脚を展示いたします。

ものがたりの始まりは、曲木技術によって量産の礎を築いた「トーネット」社の1859年モデル「No14」。それは、ムダを削ぎ落とした構造とデザイン、ノックダウン式によって輸送コストもミニマムに抑えた、当時大きな驚きをもって迎えられた椅子でした。「No14」は2019年、誕生から160年を迎えます。

曲木家具のメーカーは、原材料であるブナが生育する地域に工場を増やし、多数のバリエーションを生み出しながら椅子を量産していきます。さらに1920年代に、「トーネット」社は「バウハウス」との連携によって、マルセル・ブロイヤー、ミース・ファン・デル・ローエらが考案したスティールパイプを曲げた椅子と、曲木に次ぐもう一つの構造革命となるカンティレバー（片持ち構造）チェアの生産にも与しました。二つの曲げの技術は世界的に広まり、日本でもそれらの技術を応用した、独自の椅子の数々が生み出されています。

本展では、椅子が一つの生命体であるとイメージし、曲げの技術から生み出された50脚を通じて、その“DNA” のネットワークの視覚化を試みます。デザインのアーキタイプ(元型）とバリエーション、リミックスや逸脱のモデルが一堂に会す稀な機会でもあります。

脈々と続く椅子の「生命の樹」が読めてくると、「新しい」デザインの見え方も変わってくるのではないでしょうか。消費されない、長く生き続ける「もの」の秘密について皆さんとともに考える機会を持てれば幸いです。

ATELIER MUJI GINZA

6

展覧会ブックレット（椅子の生命の樹）

Chair name
year
designer
manufacture（展示品）
material

※年代は全てデザイン年です。
※製品名は現行品のメーカーごとに異なる場合があります。
また、メーカー名は本展の展示品に準じます。

原点　曲木 トーネット

今年で160歳
① No. 14
1859
ミヒャエル・トーネット (1796-1871)
Thonet
ブナ、布

② No. 14K（knotted leg）
年代、デザイナー不詳
Thonet
ブナ、籐

④ No. 6009
1871
アウグスト・トーネット (1829-1910)
Thonet
ブナ、籐

③ No. 14 ½
年代、デザイナー不詳
秋田木工
ブナ、籐

⑥ No. 7500
1876
ゲブリューダー・トーネット社
Thonet
ブナ、籐

92歳
⑤ No. 209
1927
ポール・ヘニングセン (1894-1967)
Thonet
ブナ、籐

デンマークの、リ・デザイン

⑪ サイドチェア
1939
ソーレン・ハンセン（1905-1977）
Fritz Hansen
ブナ

121歳
⑦ カフェ・ムゼウム
1898
アドルフ・ロース（1870-1933）
J. & J. Kohn
ブナ、籐

ウィーン分離派

117歳
⑧⑨ 郵便貯金局のためのスツール / 郵便貯金局のためのアームチェア（No. 6316）
1902
オットー・ワグナー（1841-1918）
GTV
ブナ、アルミニウム
※ ⑧ 6F Lounge にて展示

11歳
⑫ ブナ材曲木チェア
2008
無印良品
Thonet
ブナ

ウィーン工房

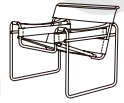
89歳
⑩ No. 811
1930
ヨゼフ・ホフマン (1870-1956)
Thonet
ブナ、籐

曲木から スティールパイプへ

93歳
⑯ S33
1926
マルト・スタム（1899-1986）
Thonet
スティールパイプ、レザー

91歳
⑰ S64
1928
マルセル・ブロイヤー（1902-1981）
Thonet
スティールパイプ、籐、木

デ・ステイル
バウハウス



94歳
⑬ クラブチェア B3（ワシリー）
1925-26
マルセル・ブロイヤー（1902-1981）
Gavina
スティールパイプ、キャンバス

92歳
⑭ フォールディング・チェア D4
1927
マルセル・ブロイヤー（1902-1981）
TECTA
スティールパイプ、キャンバス

⑮ サイドチェア B5
1926-27
マルセル・ブロイヤー（1902-1981）
Thonet
スティールパイプ、キャンバス

新たな曲木の イノベーション

88歳
㉕ 41 アームチェア パイミオ
1931-32
アルヴァ・アアルト (1898-1976)
Artek
バーチ、成型合板

87歳
㉖ 42 アームチェア
1932
アルヴァ・アアルト (1898-1976)
Artek
バーチ、成型合板

92歳
⑱ MR10 / MR20（アームチェア）/ MR10（ラタン仕様）
1927
ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ (1886-1969)
Knoll, Thonet
スティールパイプ、レザー ⑱ / レザー ⑲ / 籐 ⑳

92歳
⑲

92歳
⑳

89歳
㉑ ブルノ
1930
ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ (1886-1969)
Knoll
スティールパイプ、レザー
※ 6F Lounge にて展示

ロシア
構成主義

㉒ タトリン・チェア
1927
ウラジーミル・タトリン (1885-1953)
Nikol Internazionale
スティールパイプ、レザー

イタリア
合理主義建築

83歳
㉓

83歳
㉔

㉓㉔ ラリアーナ / サンテリア（アームチェア）
1936
ジュゼッペ・テラーニ (1904-1943)
Zanotta
スティールパイプ、成型合板 ㉓ / レザー ㉔

㉝ リア・チェア
1966
クラウディオ・サロッキ（1934-2012）
Sormani
アルミニウム、ヘアカーフ

㉞ カンティレバー・チェア
1987
ニルス・ヨルゲン・ハウゲセン (1936-2013)
プロトタイプ（生産化されず）
スティールパイプ

パントンの驚きの
カンティレバー・チェア

51歳
㊴ パントン・チェア
1960（製品化は 1967）
ヴェルナー・パントン (1926-1998)
Herman Miller
FRP（繊維強化プラスチック）

㊳ No. 276 S チェア
1956（製品化は 1965）
ヴェルナー・パントン (1926-1998)
Thonet
成型合板

51歳
㊶ メッツァドロ
1957（製品化は 1970）
アキッレ・カスティリオーニ (1918-2002)
＆ピエルジャコモ・カスティリオーニ（1913-1968）
Zanotta
スティール、ブナ（横木）

カスティリオーニ流に
曲げる

㊵ トリック
1965
アキッレ・カスティリオーニ (1918-2002)
＆ピエルジャコモ・カスティリオーニ（1913-1968）
BBB Bonacina
ブナ、成型合板

エンツォ・マーリの デザインの原点

㊿ アームチェア
2001
エンツォ・マーリ (1932-)
GTV
成型合板、アルミニウム（フレーム）

フランク・ゲーリーが
曲げる

29歳
49 クロスチェック・チェア
1990
フランク・ゲーリー (1929-)
Knoll
カエデ

ル・コルビジェ、シャルロット・ペリアン、ピエール・ジャンヌレによるスティールパイプ・チェア・シリーズを
トーネット・ムンドゥスが制作（1964 年より Cassina の LC コレクション）。

87歳
㉗ スツール 60
1932-33
アルヴァ・アアルト (1898-1976)
Artek
バーチ

㉘ スツール X600
1954
アルヴァ・アアルト (1898-1976)
Artek
バーチ

㉛ N118
1984
ペン・アフ・シュルテン（1939〜）
Artek
バーチ、布

マグヌッセンの
スティールパイプ・チェア

㉟㊱㊲ Yoga / Z-Down チェア / Z チェア
1960s / 1965 / 1960s
エリック・マグヌッセン (1940-2014)
Kevi ㉟, Torben Orskov
スティールパイプ、成型合板 ㉟ / レザー ㊱ / キャンバス ㊲

もう一つの
曲木家具の宝庫 日本

61歳

59歳

㊷㊸ スツール No. 202 / アームチェア No. 207
1958 / 1960
剣持勇 (1912-1971)
秋田木工
ブナ、籐 ㊷ / ブナ ㊸
※ ㊸ 6F Lounge にて展示

㊹ アームチェア
1967
柳宗理 (1915-2011)
秋田木工
ブナ、籐

㉙ モデル 5331
1960
ルッド・チュゲーセン (1932-)
＆ジョニー・ソーレンセン (1944-)
Magnus Olesen
ブナ

㉚ スツール
1970's
ルッド・チュゲーセン (1932-)
＆ジョニー・ソーレンセン (1944-)
Magnus Olesen
ブナ

㉜ No. 270
1966, 生産 70〜
ヴェルナー・パントン (1926-1998)
Thonet
バーチ、成型合板

ラケット構造で
曲げる

㊺ OM5017
1965（坂倉準三建築研究所時代）
長大作 (1921-2014)
天童木工
チーク

㊻ CCC（Carbon Composite Chair）
1985
川上元美 (1940-)
ヤマハ → 岡村製作所
ブナ、カーボンシート

㊼ PK15
1979
ポール・ケアホルム (1929-1980)
PP Møbler
ブナ、レザー

㊽ ブレッツェル・チェア（通称）
1952 (1957 アームレスト付)
ジョージ・ネルソン (1908-1986)
CADSANA
バーチ、ウォールナット
※ 6F Lounge にて展示

『考える。益子の新しい伝統に向けて』展

Exhibition “To think: Towards a new tradition in Mashiko”

2019年11月29日(金)–2020年3月8日(日)

Gallery1では、MASHIKO Productとの協働による「栗の木プロジェクト」をスタートします。

第三弾となる「栗の木プロジェクト」のテーマは「考える」。

はじまりは、マーリが1970年代にダネーゼ社のため、磁器工房の職人とともに手がけた器のシリーズ〈SAMOS〉でした。その手法とは、作家による工芸的な手仕事でも、工業製品でもない、職人とデザイナーが対等に対話することによってクオリティを生み出す手仕事のあり方です。私たちは、その哲学から発想を得、独自のワークショップの実験をスタートしました。
ワークショップは、日常使いの器として関東圏を中心に親しまれる益子焼の産地を舞台に、現地の陶芸家と、ATELIER MUJI GINZA Gallery1が構成したデザイナーを含むチーム、計11名によって6日間にわたり繰り広げられました。本展では、そのプロセスを語る約150点以上の試作やツール、さらに〈SAMOS〉3点が一堂に会します。
今回の展示は、益子焼の新たな伝統に向けた長期プロジェクトのローンチであり、私たちは今後もワークショップを継続し、メソッドを進化させていく予定です。「多くの職人たちは、自動的に手を動かし、考えることなく“伝統”を右から左へと継承している」というマーリのことばについて、自身の頭で考えることからはじめ、手を使って新たなメソッドと形を模索していきます。

みなさんも一緒に、手仕事の未来、伝統の未来について考えてみませんか？

ATELIER MUJI GINZA

考える。
益子の
新しい伝統に
向けて 展
Exhibition
To think: Towards a new
tradition in Mashiko

考える。
益子の
新しい伝統に
向けて

Gallery 2

未来を耕すデザインが文化になるために、私たちができること。
今を生きる私たち一人一人が真摯に考え、
多様な意見や価値観を共有し、行動する。

何一つ、人ごとではない。
自分が信じる未来のために人生をかけて、
たゆまず怯まず拳を上げ、抗い、闘い、
国を超えて多くの人たちに愛されるあるデザイナーとの出逢いが、
無印良品に一つの大切な種を生みました。
その名は、「栗の木プロジェクト」。

栗の苗を植え、その成長を慈しみながら育てると、やがて木は木陰を作り、実りをもたらし子孫を残し、そして道具や家具や家となり、その時々で人の暮らしを支えます。そんな活動を、デザインを通してその人なりのやり方で実践してみよう、というプロジェクト、それが栗の木プロジェクトです。そして、ATELIER MUJI GINZAに、その小さな種を播くことから始めました。

2019年、Gallery2では4つの展覧会を開催。

『言葉からはじまるデザイン 栗の木プロジェクト』展。Gallery2では、デザインの可能性を拡張する「栗の木プロジェクト」を言葉とともに始めました。「デザインは(　　)」。さまざまな地域、世代、職業の方々に、俳句のように短い言葉で(　)の中を表現していただきました。

今年は、ワイマールに先進的な総合芸術学校バウハウスが創立されてから100年目にあたり、デザインにまつわる重要な記録を保存・活用し、未来へ伝達する試みとして『Archives: Bauhaus』展を開催。

地球上で加速的に経済発展を遂げた全人類が解決しなければならない共通の課題が、廃棄物問題の深刻化です。『廃業を目指すデザイン』展は、「デザイン」というメガネで世界を見渡し、創造性豊かなオランダの挑戦に注目しました。

『インドの手仕事、文字になる』展では、地域固有の文化とイノベーションが融合し、社会に新しい価値を生み出すデザインについて、インドにおける書体をめぐる活動を紹介しました。

社会的な課題解決を目指すデザインの可能性は、地域を超えて心とモノをつなぎ未来を耕します。

株式会社良品計画 企画デザイン担当
ATELIER MUJI GINZA シニア・キュレーター　鈴木潤子

『言葉からはじまるデザイン 栗の木プロジェクト』展

Exhibition “Design emerging from words - The Chestnut Tree Project”

2019年4月4日(木)−6月23日(日)

デザインって、何だろう。なんて簡潔な難題。

質問は「デザインは(　　)」。
さまざまな地域、世代、職業の方々に、俳句のように短い言葉で(　)の中を表現していただきました。その言葉たちが、会場に群生しています。

本展では、デザインの可能性を拡張する「栗の木プロジェクト」のはじまりを言葉とともに始めます。栗の苗を植え、その成長を慈しみながら育てると、やがて木は木陰を作り、実りをもたらし子孫を残し、そして道具や家具や家となり、その時々で人の暮らしを支えていきます。そんな活動を、デザインを通してその人なりのやり方で実践してみよう、というプロジェクトです。

さて、みなさんも、言葉からはじめてみませんか？

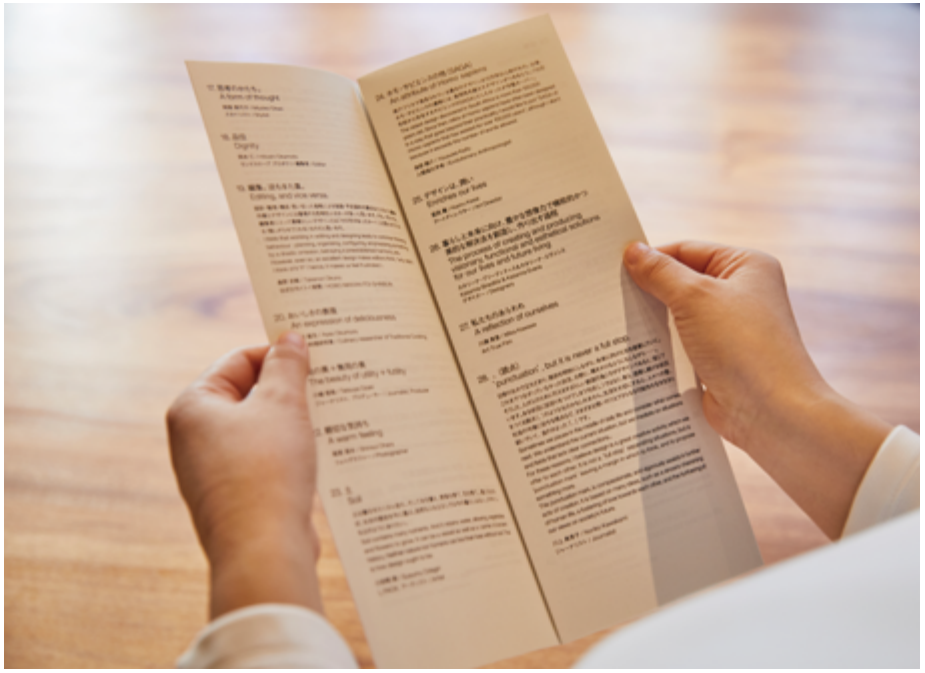
ATELIER MUJI GINZA

言葉からはじまるデ
栗の木プロジェクト
"Design emerging from wor
The Chestnut Tree Project"
質問は「デザインは（　　）」。
Here is the answer to the question:
"Design is (　　)".

Nacása & Partners Inc.

ハンドアウト、もしくは浮遊する言の葉を持ち帰れる簡素な展覧会

思考するにせよ、対話するにせよ、デザインにとって言葉は大切なツールです。本展では、性別、年齢、地域、職業などを超えた104名の方々からいただいた、デザインとは何か、という短い問いの答えを会場で表現しました。その空間では、まるで言の葉そのもののように茂り、揺らめき、光と影を伴って浮遊していました。それらは日本語と英語、時にイタリア語や記号によって表現され、簡素な素材を用いた再編集によって持ち帰れるミニマムな展示＝冊子になりました。



『Archives: Bauhaus』展

Exhibition “Archives: Bauhaus”

2019年6月28日(金)−9月23日(月)

2019年は、ワイマールに先進的な総合芸術学校バウハウスが1919年に創立されてから100年目にあたります。

第一次大戦の敗戦を期に、ドイツでは芸術と産業の融合を目指す気運が醸成され、やがて国ではなく個である芸術家や建築家などが連携し主導してバウハウスに結実しました。それは産業革命後に欧州で加速する大衆文化の課題を解決し、新しい時代への理想の追求でもありました。世界政治が混迷を極める当時、新しい社会の拡張性を目指したバウハウスは1933年に閉校します。その活動は2つの世界大戦に挟まれた14年間という短い期間ではありましたが、ドイツのみならず世界各地に今なお強い影響を与えています。

Gallery2では、デザインにまつわる重要な記録を保存・活用し、未来へ伝達する試みとしてのシリーズ：Archivesにてバウハウスを取り上げます。

モダンデザインの潮流の中で、多様な領域を横断する学校教育というユニークな形式で革新を目指したバウハウス。この1世紀に私たちに何を与え、未来に何をもたらすのでしょうか。この問いは、今を生きる私たちにバトンが引き継がれています。

ATELIER MUJI GINZA

展覧会に寄せて

2017年にFound MUJIのプロジェクトでドイツを巡りました。様々な都市を訪問し、工場に行きプロダクトの製造過程を見学したり、工芸家の工房を訪問しその環境と技術を見て回りました。その中で見えてきたのは実直で丁寧な仕事への姿勢で、我ら日本人にも共感する部分が多いという点でした。
その旅の中でもバウハウス訪問は特別なものでした。バウハウスはベルリンから1時間ほど車で移動したデッサウという町にあります。バウハウスから近いところにはユンカースという航空機製造会社があったことでも知られていて、新しい技術や思想が結実して新しい動きが芽生える場所としての空気感があったのでしょう。大変な激動の時代に生まれたバウハウスは世界的にも例のない新しい総合芸術学校でしたが、そこでは新しい時代に目を向け生活をよりよく変えていく為の様々な実験的な活動が行われました。
バウハウスと無印良品は学校と会社という違いはありますが、どちらも時代に求められる製品を作り出し新しい生活スタイルを生みだそうとする点では共感できる部分が数々あると思います。
アーカイブすることは、未来への伝達行為です。本展ではバウハウスの生徒の中でも優れた才能を発揮したマリアンネ・ブラントの実験的な写真作品や照明器具、ヴィルヘルム・ヴァーゲンフェルトの作品などと共に無印良品から今回のテーマに沿って選んだ製品を一緒に並べます。
ここで皆さんとこのアーカイブを共有し共に考え得たものから実行することの大切さを再認識できればと考えます。

ランドスケーププロダクツ ファウンダー / プロデューサー
中原 慎一郎

Archives:
Bauhaus 展
10:00–21:00
MUJ

Bauhau

ZUCKE
KAFFEE
MEHL
SALZ

Archives:
Bauhaus 展

bauhaus
1919-1933
bauhaus

『廃業を目指すデザイン』展

Exhibition “Designed to go out of business”

2019年9月27日(金)−12月15日(日)

21世紀は、環境の世紀。地球上で加速的に経済発展を遂げた全人類が解決しなければならない共通の課題が、廃棄物問題の深刻化です。日常生活からエネルギー生産まであらゆる場所で刻々と進行し、現在のみならず未来に多大な影響を与えますが、この問題を生みながらも解決できるのは、私たち人類だけです。

私たちはいま、何ができるのか？この命題に、世界中で様々な取り組みがなされています。

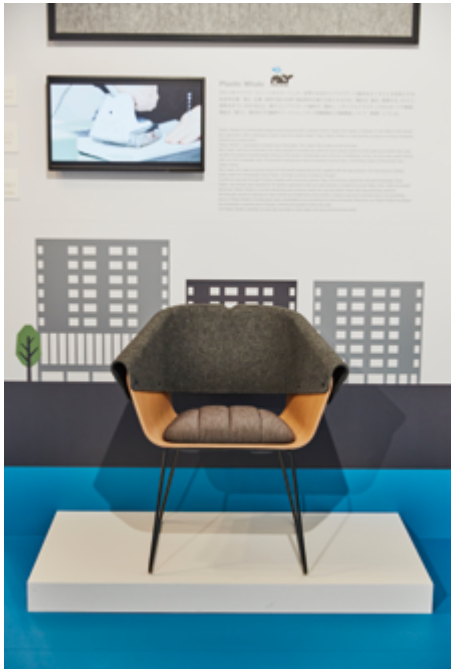
本展は、「デザイン」というメガネで世界を見渡し、創造性豊かなオランダの挑戦に注目しました。世界の水辺から廃棄物を回収し新たな価値を作りその役目を終えるべく「廃業」を目指すのは、日本と歴史的に関係の深いオランダ、アムステルダムに拠点を置く世界初のプラスチック・フィッシング会社です。アムステルダムの運河で、水面に浮かぶ廃棄物を乗客がフィッシングネットで釣り上げる有料のボートツアーを日々運航しています。
回収したペットボトルのリサイクル材でボートを作りツアーを実施するアイデアは、あるひとりの市民から始まりました。いつも見慣れている何気ない暮らしのシーンから発想し、誰でも楽しみながら難解な課題解決に参加できるデザインは、多くの人々から愛され広がっています。

社会的な課題解決を目指すデザインの可能性は、心とモノをつなぎ未来を耕します。

ATELIER MUJI GINZA

廃業を目指すデザイン展
Designed to go out of business

新たな
視点
513



『インドの手仕事、文字になる』展

Exhibition “Handcraft for the digital: Type design from India”

2019年12月20日(金)−2020年3月8日(日)

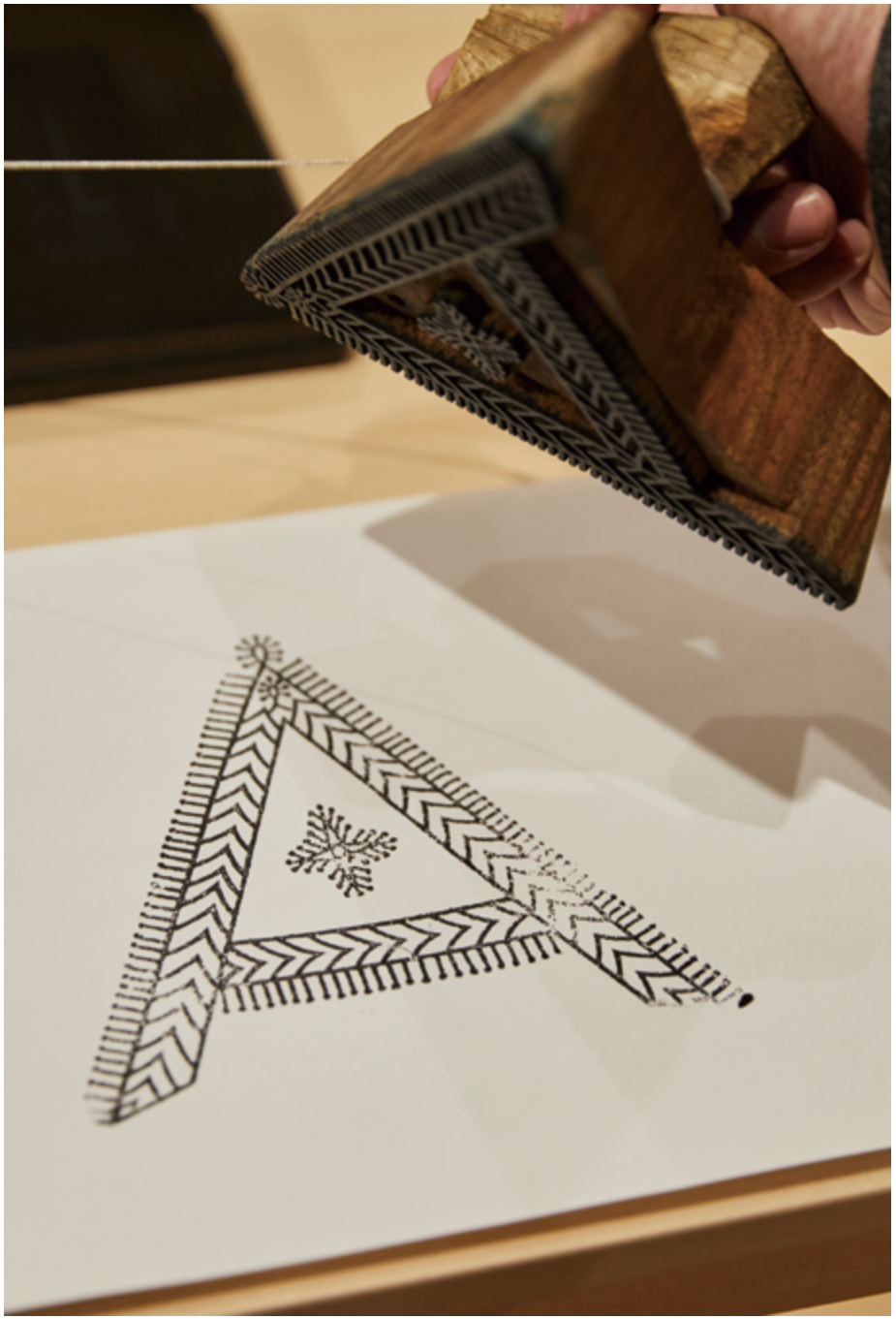
世界は、文字であふれています。今日のデジタル社会において、書体(文字の形とスタイル)の重要性はさらに高まりました。表現したい、伝えたい、残したい、わかり合いたい。書体は、私たち人類にとって豊かな表情や物語、美しさを備えた道具であり糧でもあります。

本展では、地域固有の文化とイノベーションが融合し、社会に新しい価値を生み出すデザインについて、インドにおける書体をめぐる挑戦を紹介します。

インドのデザイナーが2011年に立ち上げたプロジェクト「The Typecraft Initiative(タイプクラフト構想)」では、デザイナーとインド各地の工芸や民俗芸術の職人である女性たちが、ワークショップ形式でインド、ラテン語のデジタル書体を共同制作しています。地域の生活に根ざした入れ墨、刺繍、陶芸、絵画など幅広い分野の職人たちと、時間をかけてその特性や個性に合わせたワークショップを実施。この過程を経て創られた書体をフォントとして製品化することで、デザインの可能性や職人である女性たちの新たな職域を広げる取り組みです。それは、近代化の波に消えゆくインドの手仕事を、未来につなげる活動にも通じています。

さまざまな魅力と背景を持つインド各地の文化が文字になる、この壮大なプロジェクト。女性たち職人の手仕事から生まれる文字は、今日もインドの暮らしの中で育まれています。

ATELIER MUJI GINZA



HANDCRAFT FOR THE DIGITAL:
TYPE DESIGN FROM INDIA
インドの手仕事、文字になる
KUTCH

પાટલી
Pablo Devanagari Typecraft
RABARI
GODNA

GODNA
KUTCH

TYPE DESIGN
インドの手仕事、文字になる 展

オープニングトーク

無印良品 銀座のオープンを記念し、無印良品のアドバイザリーボードおよび弊社会長の金井がそれぞれの考える「デザイン」について語る5つのトークイベントを実施しました。

1「日本の布エトセトラ」

日時：2019年4月11日（木）19:00–20:10
講師：須藤玲子（テキスタイルデザイナー /無印良品アドバイザリーボード）
参加者数：52人

2「デザインは水のようなもの」

日時：2019年4月12日（金）19:00–20:10
講師：原研哉（デザイナー /無印良品アドバイザリーボード）
参加者数：47人

3「栗の木プロジェクトについて少しお話しします。」

日時：2019年4月13日（土）10:30–11:40
講師：金井政明（株式会社良品計画 代表取締役会長）
参加者数：42人

4「デザイン、言葉、無印とMUJI」

日時：2019年4月18日（木）19:00–20:10
講師：小池一子（クリエイティブディレクター /無印良品アドバイザリーボード）
参加者数：46人

5「デザインは誠実さ」

日時：2019年4月19日（金）19:00–20:10
講師：深澤直人（プロダクトデザイナー /無印良品アドバイザリーボード）
参加者数：59人

Gallery1

『変える。エンツォ・マーリと“栗の木プロジェクト”』展
―永井敬二コレクションより―

2019年4月4日（木）–7月21日（日）

主催：無印良品
協力：永井敬二（インテリアデザイナー）
協力：Studio Enzo mari
会場構成：萬代基介建築設計事務所
グラフィックデザイン：6D 木住野彰悟
施工：HIGURE 17-15 cas
Special thanks：近藤大輔、伊藤晴子、城谷耕生、サンチョル リ、オミ タハラ、三木創平、藤谷鉄弥
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
展覧会担当：田代かおる、永田貴大
来場者数：512,810人（109日間）

ギャラリートーク「マーリさんと僕。」

日時：2019年5月19日（日）18:00–19:10
登壇者：永井敬二（インテリアデザイナー）
田代かおる（ATELIER MUJI GINZAキュレーター）
参加者数：50人

永井敬二さんが、エンツォ・マーリのデザインと意識せずに世界から集めたプロダクツは100点以上に上ります。どのように、どんな風に見つけてきたのか。それは「もう一つのデザイン史」です。本展に展示した作品を中心に永井さんが語りました。

『長く生きる。“DNA”を繋ぐ50脚の椅子』展
―永井敬二コレクションより―

2019年7月26日（金）–11月24日（日）

主催：無印良品
協力：永井敬二（インテリアデザイナー）
グラフィックデザイン：東川裕子
写真：知識たかし
施工：HIGURE 17-15 cas
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、
無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
展覧会担当：田代かおる、永田貴大
来場者数：319,734人（122日間）

プレ・オープニングイベント

ギャラリーツアー「椅子のものがたり」
日時：2019年7月25日（木）19:00–20:10
登壇者：永井敬二（インテリアデザイナー）
参加者数：54人

世界屈指の椅子コレクターとして知られる永井敬二さん。かつて、曲木の椅子は古くさいと感じていたそうですが、あるきっかけで考えが変わりました。どうしてなのでしょう。本展に登場する椅子の興味深いストーリーを、ツアー形式でご案内しました。

トークイベント「椅子の“DNA”ってなに？」

日時：2019年8月1日（木）19:00–20:20
登壇者：林裕輔（DRILL DESIGN）
池田美奈子（九州大学 芸術工学研究院 准教授）
田代かおる（ATELIER MUJI GINZAキュレーター）
参加者数：42人

デザインについて日々考えを巡らすメンバーが、技術とかたちの“DNA”の繋がりについて、また、長生きしてきたモノと、これから生まれる長寿デザインについて語り合いました。

トークイベント

「長く生きるデザインについて語ろう」

日時：2019年11月16日（土）17:30–19:00
登壇者：永井敬二（インテリアデザイナー）
大城健作（デザイナー）
加藤晃（株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当 デザイナー）
参加者数：59人

50脚の椅子が福岡のインテリアデザイナー 永井敬二さんの膨大なモダンデザイン・コレクションの一部であることをご存知でしょうか。1960年代より物と人の縁を拡げ、世界各地でデザインを見つめてきた永井さんが考える、長く人生を共にしたくなる物とは？　また、ミラノを拠点に活動し家具プロジェクトも多く手がけるデザイナー、大城健作さんが作り手の視点から。さらに弊社の生活雑貨部企画デザイン担当のデザイナー、加藤晃さんも加わって、長く生きる、あるいは短命でも記憶に残るデザインのあれこれについて語りました。

『考える。益子の新しい伝統に向けて』展

2019年11月29日（金）–2020年3月8日（日）

主催：無印良品
企画協力：MASHIKO Product
空間デザイン：ya
グラフィックデザイン：東川裕子
施工：HIGURE 17-15 cas
協力：永井敬二
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
ワークショップ参加者：
益子町の陶芸家｜阿部智也、大塚一弘、川島郁朗、濱田友緒
無印良品・IDÉE｜遠藤紗和見、加藤晃、小嶋紗代子、小林真紀、田代かおる、永田貴大、深田新（五十音順）
ビデオ制作：堀内祐輔
（構成：永田貴大、撮影：尾原深水）
展覧会担当：田代かおる、永田貴大、遠藤紗和見
来場者数：190,253人（101日間）

オープニングイベント・ギャラリートーク

日時：2019年11月29日（金）19:00–20:30
登壇者：濱田友緒（濱田窯 代表）
大塚一弘（清窯 代表）
塚本倫行（道祖土和田窯 代表）

「考える。益子の新しい伝統に向けて」展オープニングを記念し、益子町の濱田窯 代表 濱田友緒氏、清窯 代表 大塚一弘氏、道祖土和田窯 代表 塚本倫行氏をお招きし、「益子焼」の定義とは何か？ また本ワークショップについて、MASHIKO Productの未来のビジョンについて語っていただきました。

ワークショップ『益子 X ATELIER MUJI GINZAの陶器を作ろう』（開催延期）

日時：2020年2月23日（日）
11:00–12:30 / 13:30–15:00 / 16:00–17:30
登壇者：大塚一弘（陶芸家/清窯 代表）
川島郁朗（陶芸家）

2019年、益子の陶芸家とATELIER MUJI GINZAが編成したデザイナーを含むチーム計11名が、益子の新たなスタンダードを模索するため開催したワークショップ。そこで考えられた、専門技術がなくても成形が可能な10のメソッドを使った益子の器作りを、銀座で行います。益子の陶芸家2名が成形を指導。講師陣が作品を益子町へ持ち帰り「清窯」で焼成します。

「銀座の小さな益子陶器市」（開催延期）

日時：2020年3月7日（土）・3月8日（日）10:00–18:00
出店者：阿部智也
伊藤丈浩（佳乃や）
大塚一弘（こうじんや）
川島郁朗（つかもと）
佐藤敬（ましこ）
萩原芳典（陶庫）
濱田友緒（佳乃や）
濱田窯（ましこ）
和田窯（陶庫）

本展の締めくくりとなるイベントは、益子町を拠点とする7陶芸家と2窯による陶器市。
現代の益子を物語る陶器の数々で、日々の生活に新たな風景を採り入れてみませんか。

Gallery2

『言葉からはじまるデザイン 栗の木プロジェクト』展

2019年4月4日(木)–6月23日(日)

主催：無印良品
会場構成：萬代基介建築設計事務所
グラフィックデザイン：6D 木住野彰悟
施工：HIGURE 17-15 cas
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
展覧会担当：鈴木潤子、小嶋紗代子、椙山由香、遠藤紗和見
来場者数：432,772人(81日間)

展示協力：
青野尚子/芦沢啓治/新居幸治/有元利彦/安藤朋子/猪飼尚司/五十嵐太郎/石川直樹/岩立広子/イシャン・コースラ/インゲヤード・ローマン/江口宏志/越後屋美和/遠藤豊/大平貴之/岡啓輔/岡尾美代子/岡本仁/奥野武範/奥村彪生/小崎哲哉/尾原深水/小田桐奨/海部陽介/葛西薫/カタリーナ・ブリーディティス＆カタリーナ・エヴァンス/川瀬美香/川上典李子/川原隆邦/川村格夫/木住野彰悟/木寺紀雄/木部暢子/金善姫/櫛田理/蔵屋美香/小池一子/郷泰典/小林和人/小林武彦/コンスタンチン・グルチッチ/作原文子/佐久間磨/眞田岳彦/サム・ヘクト/サンチョル・リ/塩津丈洋/志賀理江子/柴田文江/ジャスパー・モリソン/笑達/城谷耕生/杉本博司/杉山享司/鈴木芳雄/須藤玲子/ゼウレル・リマ/高橋瑞木/高嶺エヴァ/田中敦子/千葉隆博/塚田哲也/土田貴宏/都築響一/鶴岡真弓/鶴林万平/手槌りか/土佐信道/冨井大裕/富田玲子/林裕輔 安西葉子/永井敬二/長尾智子/中西孝之/中原慎一郎/中村至男/西原弘貴/丹羽朋子/原研哉/原田麻魚/秀親/広瀬浩二郎/フィリップ・クローデ/深澤直人/藤崎圭一郎/藤本均定成/藤原大/眞砂絵里子/丸若裕俊/萬代基介/ミケーレ・デ・ルッキ/三田修平/三谷龍二/皆川明/港千尋/本瀬あゆみ/本吉洋一/森岡督行/モリカワリョウタ/山岸綾/張永和/柚木沙弥郎/若杉浩一
※展覧会冊子と同様の順番で記載しています。

『Archives: Bauhaus』展

2019年6月28日(金)–9月23日(月)

主催：無印良品
企画協力：有限会社ランドスケーププロダクツ
展示協力：泉哲雄・加藤孝司・成田博昭・南貴之・VELVET THE SHOWROOM
グラフィックデザイン：下田理恵
施工：株式会社東京スタデオ
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
展覧会担当：鈴木潤子、小嶋紗代子、椙山由香
来場者数：242,568人(88日間)

ギャラリートーク「Archives: Bauhaus」

日時：2019年6月29日(土)18:00–19:30
講師：北村仁美(東京国立近代美術館工芸館 主任研究員)
加藤孝司(フリーランスライター/フォトグラファー)
中原慎一郎(ランドスケーププロダクツ ファウンダー/プロデューサー)
片岡義弘(株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当)
参加者数：54人

バウハウスとは、どのような学校だったのか。どのような人たちが、どう関わっていたのか。その先進的な学校としてのあり方をゲストを交えて語りました。

ワークショップ「How to use the Egg Coddler —エッグコドラーを使った料理教室—」

日時：2019年7月13日(土)14:00–15:30
講師：冷水希三子(料理家/フードコーディネーター)
参加者数：9人

エッグ・コドラーとは、「coddled egg＝とろ火で煮た半熟卵」から命名された、湯せんで卵を調理する器具です。バウハウス出身のデザイナー、ヴィルヘルム・ヴァーゲンフェルトが1930年代にデザインした美しいエッグコドラーを使って、手軽で美味しい料理を学びました。

夏休みワークショップ「バウハウスの建築について考えてみる」

日時：2019年8月9日(金)14:00–16:30
講師：五十嵐太郎(建築史家/東北大学大学院教授)
参加者数：8人

ご自宅からお持ちいただいた日用品や、ワークショップ当日に無印良品店舗内で探してご購入いただいた商品を使って、お客様ご自身が考えたBauhaus建築の模型を作っていただき、作品発表と五十嵐氏による講評を行いました。

トーク「建築と教育とバウハウス」

日時：2019年8月9日(金)19:30–21:00
講師：五十嵐太郎(建築史家/東北大学大学院教授)
参加者数：36人

建築史家であり大学で教鞭を取りながら精力的に出版活動を行なっている五十嵐氏が、バウハウスや現在の建築、教育にバウハウスが与えた影響などを語りました。

ワークショップ「Visual Study: Bauhaus and Photography —バウハウス的写真編集の楽しみ方—」

日時：2019年9月15日(日)13:00–16:00
講師：若木信吾(写真家)
参加者数：10人

バウハウスの教師として実験的な写真手法を数多く残し、後世に多大なる影響を与えたラスロ・モホイ=ナジ。新しい視覚表現としての写真の在り方を追求し続けた彼の足跡に準えたワークショップを開催しました。写真家・若木信吾さんを講師にお迎えし、撮影とそのアウトプットとしての写真を用いて、レイアウトを楽しみながら、写真編集の奥深さや可能性を探求しました。

『廃業を目指すデザイン』展

2019年9月27日(金)–12月15日(日)

主催：無印良品
企画協力：Plastic Whale、株式会社モノファクトリー
協力：オランダ王国大使館
グラフィック・空間構成：パワープレイス株式会社
施工：HIGURE 17-15 cas
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
コーディネーション・翻訳：大場千穂
展覧会担当：鈴木潤子、片岡義弘、椙山由香、島田果奈、加藤彰子
来場者数：199,005人(80日間)

オープニングトーク「廃業を目指すデザイン」
日時：2019年9月28日(土)10:30–12:00
講師：マリウス・スミット(Plastic Whale/Circular Furniture 創設者)
参加者数：37人

オランダ、アムステルダムに拠点を置く世界初のプラスチック・フィッシング会社Plastic Whale/Circular Furniture（プラスチックホエール・同サーキュラーファニチャー）の創設者、マリウス・スミット氏が語るその活動の過去、現在、未来を語りました。

学生向けセッション「未来の社会を考えよう」
日時：2019年9月29日(日)10:30–12:00
講師：マリウス・スミット(Plastic Whale/Circular Furniture 創設者)
参加者数：18人

学生に向けたワークショップを開催。マリウス・スミット氏と一緒に、地球の未来について語り合いました。

トーク&懇親会「Plastic Whaleについて語ろう」
日時：2019年9月30日(月)18:30–21:00
会場：駐日オランダ王国大使館　大使公邸
講師：マリウス・スミット(Plastic Whale/Circular Furniture 創設者)
参加者数：56人

世界初のプラスチックフィッシング会社Plastic Whale/Circular Furniture（プラスチックホエール・同サーキュラーファニチャー）を起業したきっかけやその活動について、創設者のマリウス・スミット氏が語りました。トーク終了後は懇親会を開催。

トーク「使い方の創造と捨て方のデザイン」
日時：2019年10月4日(金)18:30–19:40
講師：中台澄之(株式会社ナカダイ 代表取締役)
参加者数：37人

モノの価値を最大化する使い方と捨て方のデザインについて、循環を前提とした社会の実現に向けたビジネスを実践している経営者が語りました。

トーク「未来を創るソーシャルデザイン:オランダ」
日時：2019年12月5日(木)19:00–20:15
講師：竹中あゆみ(月刊『ソトコト』 編集部)
水谷ゆきお(編集者『乾祐綺(inui yuki)』名義で写真家としても活動)
桑原果林(コーディネーター、翻訳者、通訳者)
鈴木潤子(ATELIER MUJI GINZA シニア・キュレーター)
参加者数：42人

『ソトコト』11月号(10/5売)の特集は「オランダのまちづくり」。プロジェクト、食、暮らしなど、さまざまな視点からオランダの「やさしい未来」を取材されている中で、本展の企画協力「Plastic Whale」の活動も掲載されていることから、『ソトコト』編集チームと、本展の担当キュレーターによるクロストーク。

『インドの手仕事、文字になる』展

2019年12月20日(金)–2020年3月8日(日)

主催：無印良品
企画協力：The Typecraft Initiative(タイプクラフト構想)
協力：福岡アジア美術館
グラフィックデザイン：大日本タイポ組合
施工：bibariki
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部
企画デザイン担当、無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
展覧会担当：鈴木潤子、片岡義弘、椙山由香、平松真由子
来場者数：143,791人(80日間)

ワークショップ「字ぃ散歩 銀座編」
日時：2020年1月12日(日)
午前の部 10:30–12:00 / 午後の部 13:30–15:00
講師：大日本タイポ組合
参加者数：27人

文字を解体し、組合せ、再構築することによって、新しい文字の概念を探る実験的タイポグラフィ集団・大日本タイポ組合のお二人と共に、街中を散歩しながら、文字に見えるものを探して写真で発表しました。

トーク「タイプクラフト構想とインドの視覚芸術」
日時：2020年2月17日(月)19:00–20:20
講師：中尾智路(福岡アジア美術館 学芸員)
参加者数：29人

イシャン・コースラによって主導されてきたタイプクラフト構想。インドの伝統工芸や民俗芸術から英語アルファベットをデザインするという、一見簡単そうなプロジェクトに隠されたアートと社会をめぐる複雑な思いとは。ゴンド族の女性だけに継承されてきた入墨、ミティラー地方の華やかな壁画など、本プロジェクトで取り上げられた伝統的な手わざだけでなく、現代美術をふくむ濃密なインドの視覚芸術を紹介しました。

To change. Enzo Mari and the "Chestnut Tree Project"

- Curated from the Keiji Nagai collection -

変える。エンツォ・マーリと"栗の木プロジェクト"展

永井敬二コレクションより

2019年 4月4日［木］— 7月21日［日］
10:00 — 21:00 ［入場無料］

無印良品 銀座 6F ATELIER MUJI GINZA Gallery1

「栗の木プロジェクト」を植える。

なぜ無印良品で、イタリア デザイン界の巨匠、エンツォ・マーリの展覧会なのか？2002年、無印良品ではマーリによるプロジェクト、テーブルと椅子、計19点を発表しました。以来両者の交友関係は続き、ある日マーリは、私たちにこう語りました。「かつてデザインは、平等の名のもとに優れたスタンダードを生み出す役割を担ってきた。しかし高度成長を経て、目先の商品を売るための手段に成り下がった。私はデザイナーであることを恥じている。これから提案するのは、目先の経済ではなく、栗の木を植えその木が成長し、やがては人々がその実を味わい、木陰で憩えるような、長い目で未来へと持続するプロジェクトだ。企業はそうした視点を持つべきではないか」私たちはこれに賛同し、ここから何ができるかを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。本展では、1本目の栗の木を植える試みとしてエンツォ・マーリの仕事の根っこをご紹介します。そこから、ゆっくりと大きく枝葉が伸びていく姿を想像しながら。

エンツォ・マーリ

1932年イタリア、ノヴァーラ近郊生まれ。ミラノ、ブレラ芸術アカデミーで学び、視覚芸術に取り組んでいた50年代より、ブルーノ・ムナーリの紹介でデザインを手がけ始める。50年を超えるキャリアを持ち、プロジェクト数は1000を超える。クライアントの成発を恐れない徹底立商批判と、独自のデザイン哲学、ユートピアを語り続けることで社会に影響を与えてきた。

永井敬二コレクションについて

Gallery 1の展示品はインテリアデザイナー永井敬二が50年にわたり自分自身の目と手と足で世界中から集めた戦後モダンデザインを主体とする膨大なコレクションの一部をお借りしています。永井氏は1948年、佐賀県唐津市生まれ。1982年に自身のスタジオ＜ケイアンドデザインアソシエイツ＞を設立。国内外の文化交流に貢献し、デンマーク王国より「Furniture Prize」を受賞しました。Gallery1では、永井氏のコレクションをお借りしながら展覧会を開催してまいります。

ATELIER MUJI GINZA Gallery 1

"Design emerging from words The Chestnut Tree Project" exhibition

言葉からはじまるデザイン 栗の木プロジェクト 展

2019年 4月4日［木］— 6月23日［日］
10:00 — 21:00 ［入場無料］

無印良品 銀座 6F ATELIER MUJI GINZA Gallery2

デザインって、何だろう。なんて簡潔な難題。

質問は「デザインは（　　）」。

さまざまな地域、世代、職業の方々に、
俳句のように短い言葉で（　）の中を表現していただきました。
その言葉たちが、会場に群生しています。
本展では、デザインの可能性を拡張する
「栗の木プロジェクト」のはじまりを言葉とともに始めます。
栗の苗を植え、その成長を慈しみながら育てると、
やがて木は木陰を作り、実りをもたらし子孫を残し、
そして道具や家具や家となり、その時々で人の暮らしを支えていきます。
そんな活動を、デザインを通してその人なりのやり方で
実践してみよう、というプロジェクトです。
さて、みなさんも、言葉からはじめてみませんか？

ATELIER MUJI GINZA Gallery 2

© Shinsui Ohara

Archives: Bauhaus 展

2019年6月28日|金|–9月23日|月| ※会期終盤の場合は、それに準じます。
10:00–21:00
無印良品 銀座 6F ATELIER MUJI GINZA Gallery 2 入場無料

ATELIER MUJI
GINZA

長く生きる。
“DNA”を繋ぐ
50脚の椅子 展

永井敬二コレクションより

2019
07.26 FRI.
↓
11.24 SUN.
10:00 - 21:00
無印良品 銀座 6F
ATELIER MUJI GINZA
Gallery 1
入場無料

ATELIER MUJI GINZA Gallery 1

ATELIER MUJI
GINZA

廃業を目指すデザイン展

Designed to go out of business

2019年9月27日|金|-12月15日|日| ※店舗休館の場合は、それに準じます。

無印良品 銀座 6F ATELIER MUJI GINZA Gallery2　10:00-21:00 入場無料

27th September (Fri) – 15th December (Sun) 2019　*Same as MUJI GINZA store opening

ATELIER MUJI GINZA Gallery2 (MUJI GINZA 6F), 10:00–21:00　Admission free

21世紀は、環境の世紀。
地球上で加速的に経済発展を遂げた全人類が解決しなければならない共通の課題が、廃棄物問題の深刻化です。日常生活からエネルギー生産まであらゆる場所で刻々と進行し、現在のみならず未来に多大な影響を与えますが、この問題を生みながらも解決できるのは、私たち人類だけです。私たちはいま、何ができるのか？この命題に、世界中で様々な取り組みがなされています。
本展は、「デザイン」というメガネで世界を見渡し、創造性豊かなオランダの挑戦に注目しました。世界の水辺から廃棄物を回収し新たな価値を作りその役目を終えるべく「廃棄」を目指すのは、日本と歴史的に関係の深いオランダ アムステルダムに拠点を置く世界初のプラスチック・フィッシング会社です。アムステルダムの運河で、水面に浮かぶ廃棄物を乗客がフィッシングネットで釣り上げる有料のボートツアーを日々運航しています。回収したペットボトルのリサイクル材でボートを作りツアーを実施するアイデアは、あるひとりの市民から始まりました。いつも見慣れている何気ない暮らしのシーンから発想し、誰でも楽しみながら難解な課題解決に参加できるデザインは、多くの人々から愛され広がっています。
社会的な課題解決を目指すデザインの可能性は、心とモノをつなぎ未来を結します。

ATELIER MUJI GINZA

The twenty-first century. In other words, the century of the environment.
After having achieved economic development here on earth at an accelerated rate, we human beings must now face a common task to solve a deepening wastage problem. It is we humans that create and must solve this issue: progressing minute by minute everywhere, from our everyday lives to energy manufacturing, it is affecting not only the present but also our future. What can we do at this moment? There are varied efforts all over the world to respond to this question.
This exhibition focuses on a creative challenge in the Netherlands looking at the world through spectacles called "Design". Collecting waste from waterways worldwide to create new value from it until their "resource" eventually runs out, the world's first professional plastic fishing company is "aiming to go out of business" like this. They are based in Amsterdam, the Netherlands, which has a deep historical relationship with Japan. Their boat tours explore the canals of Amsterdam offering locals, tourists and companies a physical plastic fishing experience with a fishing net. A local resident came up with an idea to turn canal-caught PET bottles into tour boats. This fun, enjoyable process is designed to let anybody participate in solving the abstract question of plastic waste. This meaningful activity is already loved and supported by many, and is becoming more and more popular over time.
A possibility in design to face a social challenge will give us an opportunity to cultivate our own future while connecting minds to things.

ATELIER MUJI GINZA

考える。益子の新しい伝統に向けて展

2019.11.29 FRI - 2020.03.08 SUN
*店舗休館の場合は、それに準じます
10:00 - 21:00
無印良品 銀座 6F
ATELIER MUJI GINZA Gallery 1
入場無料

HANDCRAFT FOR THE DIGITAL: TYPE DESIGN FROM INDIA
2019.12.20 (FRI) - 2020.03.08 (SUN)
インドの手仕事、文字になる 展
ATELIER MUJI GINZA Gallery2

ATELIER MUJI GINZA Archive 2019

来場者数合計：1,039,254人

主催：無印良品
企画・運営：株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当、
無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA
ATELIER MUJI GINZAチーム：鈴木潤子（シニア・キュレーター）、
田代かおる（キュレーター）、永田貴大、片岡義弘、大島忠智、椙山由香、遠藤紗和見、
平松真由子、加藤彰子、梅沢英樹、島田果奈
会場撮影：尾原深水、Nacása & Partners Inc.（P15,38）
所在地：〒104-0061 東京都中央区銀座 3-3-5 無印良品 銀座 6F
開館時間：10:00–21:00（Salonのみ26:00まで営業）

ATELIER MUJI GINZA公式ウェブサイト：https://atelier.muji.com/jp
Twitter: @ateliermuji
Instagram: @ateliermuji_ginza
Facebook: @ateliermujiginza

本年報の作成にあたり、ご協力及びご助言いただきましたみなさまに感謝申し上げます。

発行日：2020年3月31日
発行元：株式会社良品計画
〒170-8424 東京都豊島区東池袋4丁目26番3号
発行者：株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン担当
編集者：無印良品 銀座 ATELIER MUJI GINZA 島田果奈
冊子グラフィックデザイン：長尾周平
翻訳：大場千穂、
田辺伊都美（『長く生きる。“DNA”を繋ぐ50脚の椅子』展、『考える。益子の新しい伝統に向けて』展）

*掲載している方の略歴は開催当時のものを掲載しています。
*英語版サマリーは別刷りしています。